

死を望まれた王女は敵国で白い結婚を望む



## ルドルフ・ モルゲンロート

モルゲンロート王国の国王。  
娘であるフランツェスカに対して、  
無慈悲な対応を続けるが  
その思惑とは――？

## アリーシア・ モルゲンロート

モルゲンロート王国の第二王女。  
姉であるフランツェスカを  
敵対視している。  
可愛らしい見た目に反して  
腹黒な性格。



## カリーナ・ モルゲンロート

モルゲンロート王国の側妃。  
異母娘であるフランツェスカを  
嫌っているようだが――？



## レナード・リヒター

リヒター公爵家の長男で、  
フランツェスカの元婚約者。  
王配でなく王になる道を示されて、  
フランツェスカを裏切ることを決めた。



## フランツェスカ・ モルゲンロート

モルゲンロート王国の第一王女。  
次期国王として戦に赴き、  
北の前線で軍を率いていた。  
父親である国王と婚約者の裏切りによって、  
元敵国に嫁ぐことになる。

## フリード・ルートヴィヒ・ シュヴァルツヴァルト

シュヴァルツヴァルトの王太子。  
北の前線では指揮官として軍を率い、  
モルゲンロート軍と戦っていた。  
フランツェスカが敵将だと  
気が付いていないようだが――？

## 序章

——雪が、すべてを白く塗り潰していた。

踏みしめた大地も、救いを求めるように見上げた空も、流された赤い血の色さえも、降り続く雪が覆い隠していく。ここはかつて、難攻不落と呼ばれたモルゲンロート王国の北の砦。

だが今やその栄光は見る影もなく、崩れ落ちた城壁が長きにわたる戦の爪痕を残していた。

猛吹雪が吹き付ける砦の上から見下ろせば、雪煙に紛れてこの砦へと近づくシュヴァルツヴァルト国の敵兵が見えた。

「……もう、来ないで」

クロスボウを構え、かじかんだ指先で引き金を引けば——鉄製のボルトは乾いた音を立てて空を裂くように放たれた。

その瞬間。砦の壁を登ろうとしていた敵兵は肩を深く貫かれた衝撃に体勢を大きく崩し、雪の地面へと転がり落ちていった。

「姫様、どうなさいますか？」

「捕縛して治療してあげて。死ななければそれでいいから」

「かしこまりました」

それだけを部下に告げて、私は砦の監視に戻った。

敵を殺さず生かそうとするなんて、戦場に立つ者として間違っているのだろう。だけど私は敵も味方も死なせたくないし、殺したくない。この手で奪える命があるなら、救える命もきつとあるはず。これが綺麗ごとだと、頭ではわかっている。

でも……どうか、誰も死なないで。私はその責任をすべて引き受けるから。

その時。砦の城壁の下、城門前の雪原。

向けた視線の先で、味方の補給兵が敵兵に囲まれていた。荷を下ろす暇すら与えられず、逃げる背中に次々と刃が振り下ろされていく。

「間に合って……！」

クロスボウを投げ捨てて、滑るように階段を駆け下りた。地に足が付いた瞬間、降り積もった雪に足を取られそうになるけれど構わず走り抜ける。

そして腰に携たずねえた剣を抜いて敵兵の脇腹に一撃を加えると、鈍い手応えとともに悲鳴があがった。

——瞬間。

その声に気づいた敵兵が一斉に、こちらを振り向いた。

「増援か!？」

「……なんだ、一人か」

「たかが一人増えたところでどうということはない。囲め！」

吐いた息が白く凍りつく。剣と剣がぶつかり、重い衝撃が腕に走る。自分一人ならこのくらいの人数どうということもない。だけど、負傷した味方を庇いながらでは分が悪い。

「この程度じゃ、引き下がってはくれないか……」

背後で味方の兵が倒れた気配がして、焦る。

……このままじゃまずい。早くどうにかしなければ。

「姫様！」

——その時。

雪を踏みしめる足音と共に後方から味方の姿が見えて、私は安堵感に息を吐き出した。敵兵も引き際を察したのか、こちらを警戒しつつ撤退の準備を始めていた。

……この一年、北方戦線はいつもこうだった。

空から降り続ける雪は視界を奪い、敵味方共に無駄な死だけを増やしていく。戦場に良い悪いもないだろうが、それでもここは最低最悪の戦場だと言える。

「姫様、早く砦の中へお戻りください！」

「うん、わかっている」

猛吹雪の合間。この砦の上からたった一度だけ、私は敵将の姿を見たことがある。

漆黒の軍服を纏まとい、風雪に舞う黒髪。激しい風雪に阻まれ、顔まではわからなかった。

それでも、不思議とその光景は鮮明に私の記憶に残っていた。

荒れ狂う猛吹雪の中でも一歩も退かず、軍を率ひきいるその姿が。



あの男もこの無駄な戦いを終わらせようとしている、そんな気がした。  
……だから。

まさかあんな形で再び相まみえることになるとは、この時の私は思ってもみなかった――

## 第一章

「フランツェスカ。お前にはシュヴァルツヴァルトの王太子のもとへ、嫁に行ってもらおう  
……ん？ ……聞き間違いだらうか？」

嫁に行けとかなんとか、聞き捨てならないようなことを言われたような気がする。

……いやいや、まさか。いくらお父様でも、そんなことを言うはずがない。

「……お父様。いま……なんとおっしゃいました？」

私はフランツェスカ・モルゲンロート。

ここモルゲンロート王国の第一王女で、今は亡き正妃アデルハイダの娘。

王位継承順位は第一位。来月に控えた成人の儀式を終えれば、後継者として王太女に指名される  
ことが内々に決定している。

「お前にはシュヴァルツヴァルト国の王太子、フリード・ルートヴィヒ・シュヴァルツヴァルトの

もとへ嫁いでもらう」

「わ、私がシュヴァルトに……嫁ぐ!?」

この国では性別を問わず長子が王位を継承すると、法によって定められている。だから当然、王位継承権第一位の私が将来女王となりこの国を統べることになっていた。それは約束された未来で、他国に輿入れなんて絶対にありえないはずだった。

なのに、私に嫁げと言うのか？ 女王になるために生きてきた……この私に？

しかもよりにもよって、戦場で敵対していた相手——敵将フリード・ルートヴィヒ・シュヴァルトに!?

いったい何を考えているのだろうか、この……クソ親父は。

以前から耄碌してきた気がするな。でもまだ若いし、娘としては父親のことを信じてあげたい。

だけどもやっぱり臣下としては、現実と向き合わなければいけないか……とか、色々思ったりしていたけれど。

……とうとう焼きが回ってきたのかも知れない。

「ああ、そうだ。これは停戦交渉の結果であり、モルゲンロートとシュヴァルト両国の和平の証として必要な婚姻。いくらお前でも拒否することは許さん、これは王命だ」

……はい。出ました、伝家の宝刀『王命』。

お父様は、馬鹿の一つ覚えみたいに都合が悪くなるとすぐ『王命』を出してくる。

きつと『王命』を、魔法の言葉かなにかだと思っただけに違いない。この世界に魔法はないのに。

もしも、この世界に魔法があれば……どんなによかっただろう。

けれど現実のこの世界は、剣と火薬と政治でできていた。

「戦地から戻ったばかりの娘に対して、劳いの言葉ひとつかけず次は『敵国に嫁げ』ですか？ その上、王位継承権第一位の私に？ 冗談にしても笑えませんか、お父様？」

「……なんだ、フランツェスカは私に頭でも撫でてほしかったのか？ もう大人だとばかり思っていたが、まだまだ子どもだな」

「……は？」

「ほら。照れないでこちらに来なさい、フランツェスカ。父が頭を撫でてやろう……」

「お父様？ 押揃うのはやめてください。今は真面目な話をしているのです」

「……なんだ、怒ったのか？」

思わず、お父様を蹴りそうになった。

だけどギリギリのところで踏みとどまった。

……いや、正直ちよつと蹴った。靴の先でコツンって。でも蹴ったのは玉座だし、たぶん大丈夫。

「話を戻しますが……和平のための輿入れなら、アリーシアがいるでしょう？ どうして……わざわざ私に命じるのですか」

「アリーシアのように身体の弱い娘をシュヴァルトのような蛮族どもの国に嫁がせられるわけがないだろう!? それでも姉なのか！ まったく……血も涙もないやつだな、お前は……!」

血も涙もないのはどちらだ。

今から一年前。

戦況が悪化した北の前線に、お父様は護衛の一人も付けずに私を送り込んだ。

『女王になるならば、覚悟を見せる』と、言つて。

あれから一年。停戦の報せと、早急な王宮への帰還を命ずる書状が北の砦に届いたのは今からわずか三日前のこと。

命令に従い、急ぎ王宮へと帰ってきてみれば――

戦場から命からがら帰還してきたばかりの娘を謁見の間へと呼びつけ、劳いの言葉ひとつかけることもなく、昨日まで敵国だった国に和平のために嫁げと命じる。

そんなクソ親父に『血も涙もない』などと、この私に言う資格があると思つてゐるのだろうか？

……絶対にあるわけがない。

「……次期王はどうなさるおつもりですか？ まさかとは思いますが……アリーシアを女王になさるおつもりですか？ 今、ご自分で『アリーシアは身体が弱い』と仰つておいででしたが」

女王になるために生きてきた私と違つて、腹違いの妹アリーシアは絵に描いたような可愛いらしいお姫様だ。

政務などの経験が一切ないのはもちろんのこと、帝王学も、王妃教育すらも受けていない。

それでも時折、彼女を女王にしたいと望む取り巻きの男達と衝突することがあつた。

そんな彼らはアリーシアがちょっと目を潤ませて「困りましたわ……」とでも口にすれば、喜んで動く。けれどアリーシア自身、生まれつき身体が弱く王位に興味を示さなかつたから。

私の立場が脅かされることはない……そう、思つていた。

「アリーシアには王妃になつてもらう。王妃ならば自らが政務を行う必要もないし、あの子には適任だろう」

「では王位は……いつたいうなさるおつもりですか？ 他に王位を継げる者など、この国のどこにもおりませんか？」

「王にはリヒター公爵家のレナードを据えるつもりだ。レナードならば王家の血も多少入つてゐるし、アリーシアとも仲がいい」

「れ、レナードを……王に!? 彼は王族ではありません。継承法はどうするつもりですか!? それにレナードは私の……婚約者ですよ!?!」

だんだん、めまいがしてきた。

確かにレナードには王家の血が入つてゐる。でもそれは……百年以上前に王女が降嫁したとかそんな昔の話であつて。継承法に真つ向から違反してゐるのだけだ？

「継承法については後で改正を行うつもりだ。議会の承諾も既に取り付けておる」

「なっ……!」

このっ……! 馬鹿親父! 国の根幹ともいえる継承法をいじろうとしてゐる!?

しかも既に議会まで抱き込んでゐると……!?

「それと、お前達の婚約ならばこちらで解消しておいた。レナードもこの件については既に了承済みだ」

「レナード、が……？ え、うそ……」

「だからフランツェスカ、お前は心置きなくシュヴァルツヴァルトに嫁げ。それがこの国のためにできる、お前の最後の仕事だ。来週にはシュヴァルツヴァルトから迎えがやってくる予定だ。だからそれまでに輿入れの準備を整えておくように」

「来週、ですか？」

他国への嫁入り。その準備期間が、たったそれだけ……？

冗談じゃない。あまりにも性急すぎる。

「なあに、心配することはない。ドレスや装飾品はもうこちらでひと通り揃えてある。フランツェスカ、お前は身の回りの整理をするだけでいい」

「……かしこまりました」

ドレスや装飾品の用意が多少あったとしても、そんな短い期間で準備ができるわけがない。

いくら鞆碌していたとしても、それがわからないはずがない。

……思惑おもむくが透けて見えてくる。これはつまり、そういうことだ。

◇

「——フランツェスカ」

「つ……レナード!？」

重い足取りで謁見の間から出ると、レナードが私のことを待ち受けていた。

その顔を見た瞬間。胸倉を挿んで『どの面下めんげげて私の前に出てきた？』と、問い詰めたくなった。

だけど、次期女王としてこれまで育ててきたせい……私の理性がその衝動を勝手に抑え込んだ。

「また君に会えるなんて、思っていないかった」

「どうということか、説明してもらえるかしら？ 貴方が私の代わりに王になるとは……どういふことか。それにアリーシアを王妃にとは、どういう……」

「そのままの意味だよ、フランツェスカ。僕がこの国の……モルゲンロートの王になる」

「貴方が、どうして……」

どの口がそれを言うのだろうか。

怒りで声が震える。今すぐそのすかした顔を思いつきりぶん殴ってやりたい。

「君が北の前線に行った後、国王陛下が僕に『王配ではなく、王となって国を治めてみるつもりはないか』と提案してくれたんだ。自分が王になるなんて考えたこともなかったから最初はすごく驚いた。でもすごい機会に恵まれたと思った。それに、僕は……」

「……それに、なにかしら？」

「いつも完璧で、一人で生きていける強い君よりも、僕がそばにいて守ってあげなくちゃいけないアリーシアの方が本当は……好きだったんだ」

私との婚約破棄をレナードが受け入れたと聞かされても、なにかの間違いなのだと心のどこかで期待していた自分がいた。王命に逆らえなかっただけで、それは彼の本心ではないのだと。

だけど今この瞬間、全てを理解した。私はこの男に裏切られたのだと。激しい怒りが自分の中で沸き上がるのを感じる。

このまま感情に任せて怒りをぶつけてしまえば、どんなに楽なことだろう。だけどもまだ、私の中に王族としての理性はかろうじて残っていて。

「……そう。じゃあ貴方は私を、裏切った……のね？」

「君にそう言われても、仕方ないことをしたと思っっているよ。でも……」

……なにが『仕方ない』のか。

自分の欲を叶えるためだけに私を裏切ったくせに。

「私が女王になったら王配おうえいとして隣で支えてくれると……婚約式の日に約束したじゃない！ それなのにどうして、レナード……！」

「フランツェスカ。君ならいつかわかってくれれば、僕は信じているよ。それに君はとても強い人だから、シュヴァルツヴァルトでもきつとうまくやって……」

「ふざけないで！」

——パンツ！

鈍い音が響く。気が付いた時にはすでに、私はレナードの頬ほほを打っていた。

「え……？」

そんな自分に少し驚く、けれど。

「あ……すつきり……」

そして私に頬を打たれたレナードは驚いたように、目を大きく見開いた。

「フランツェ、スカ……？」

「勝手に私のことを決めつけないで、私は強くなんでない。戦場でもずっと、ずっと……次は自分が死ぬんじゃないかって怖くて震えていた。でも私は王女だから、弱音なんて吐けなくて……！ 一人で歯を食いしばって、泣きそうになるのを必死に耐えていたの……！」

思いがあふれ出して、止まらない。

戦場でも必死に一人で耐えてきた、女王になるためには必要なことなのだと自分に言い聞かせて。

……でもそれも全部、無駄だった。

「ごめん……でも、君は……アリーシアと違って僕がいなくても……」

「……もうなにも、聞きたくありません」

これ以上、言い訳は聞きたくない。

それにレナードがなにを言い訳したところで、私を裏切ったことに代わりはない。

この日、私は全て失ったのだ。

王位も、婚約者も。これまで積み上げてきたものも全部。

「さよなら、レナード」

だから私は、くるりと踵かかとを返した。

「フランツェスカ！ 話はまだ終わってなっ……」

まだなにか言いたいこともあるのか、レナードは私を引き留めようとする。

「……フランツェスカお姉様」

「……フランツェスカお姉様」

聞き覚えのある声に、つい足が止まってしまふ。このまま立ち去ってしまったほうがいい、振り返ってはいけない。そう、頭ではわかっているのに。

まるで引き寄せられるように後ろを振り返ると、そこに立っていたのは案の定。

腹違いの妹、第二王女アリーシア・モルゲンロートだった。

「……アリーシア。私に、なんの用かしら？」

「つ……ごめんなさい、フランツェスカお姉様！ 私、こんなつもりじゃ……！」

話し始めるやいなや、謝罪の言葉を口にしたアリーシアは、今にも泣き出してしまいそうな顔で肩を震わせていた。その本性を知らなければ、誰もが守ってあげたいと思ってしまうだろう。

「……これは全部、演技なのだと。」

「それで？」

「フランツェスカお姉様が女王になるために、どんなに努力されてきたのか……私、知っていたのに……！ こんなことになるなんて思っていなかったの……本当にごめんなさい……」

「……ああ、なんて白々しい。アリーシアがなにも知らないわけがないのに。」

アリーシアは、側妃カトリーナの娘。

そして側妃カトリーナは、私の母で正妃であったアデルハイダのことを心底憎んでいた。その憎

しみはお母様が亡くなられた後も消えることなく、娘の私に向けられた。

だからこれもきつと側妃カトリーナの指示なのだろう。

「相変わらず被害者ぶるのがうまいわね、アリーシア？ それもカトリーナ様の指示かしら？」

その言葉にアリーシアの目が一瞬、険を帯びた。

「……ただ、怯える子うさぎのような愛らしい表情に戻る。」

「ち、違います……！ お母様はなにも関係なくて……！ 私は、フランツェスカお姉様に謝りたくて……それで……」

肩を震わせて切なげに泣く演技は真に迫っていて、まるで大劇場の舞台に立つ主演女優。

いつ見てもそれは見事なもので、拍手のひとつでも送りたくなってしまう。

「……アリーシア、もういい」

「レ、レナード様……！」

私とアリーシアの会話に、様子を窺っていたレナードが割って入ってきた。

「アリーシア、君が泣く必要はない。フランツェスカが、もう少し思いやりのある優しい姉だったなら、君を責めることはなかったはずだ」

「は？ なに、それ……」

聞き捨てならない言葉に思わず声が漏れる。

けれどレナードは、まるで私が間違っているとでも言わんばかりに言葉を続けた。

「フランツェスカ、君は自分の考えこそがいつも正しいと勘違いしている。だがそれは間違っ

いる」

「私が間違っている？」

「そうだ、君は王に相応しくない」

「私が王に相応しくない!? それ、どういうことか説明してくださいませんか？」

「君には他国の血が流れている。君は純粋なモルゲンロート王族ではないだろうか？」

「……もしかして、お母様のことを言っているの？」

私のお母様はクーゲル帝国から輿入れしてきた。

でも王族の婚姻で、他国の王家からの嫁入りなんてよくあること。

「モルゲンロートを治めるのに他国の血が入った者では相応しくないと、国王陛下はお考えなんだ。

そして僕もその考えに……賛成だ」

「なっ……!!」

「だから国王陛下も僕も……モルゲンロートの未来を思ってこの決断を下した。君も一応この国の王族だろう？ その判断を受け入れて、国の利益のために嫁ぐのも……王族としての義務なんじゃないのか？」

やっぱりこれは計画的な追放だったのだろう。

予想に反して、戦場で私が……死ななかつたから。

モルゲンロートとシュヴァルツヴァルト。

この二国の争いが始まったのは私が生まれる以前のこと、その火種となったのは我がモルゲン

ロートとシュヴァルツヴァルトとの国境にある、とある金鉱山の存在だった。

その金鉱山は非常に豊かな鉱脈を持っていたらしく、莫大な量の金を産出した。

そんな鉱山の所有権を巡って、モルゲンロートとシュヴァルツヴァルトは激しく対立。

両国の国境付近では小競り合いが絶えなかつたものの、当初はまだ本格的な戦争には至ることはなく、双方に特に目立つた被害はなかつた。

だけど、三年前のとある日。

なにが引き金だったのか、小さな争いは突如として全面戦争へと発展したのである。

開戦当初、地の利で勝る我がモルゲンロート側が優勢かと思われていた。

けれどシュヴァルツヴァルトの軍力は想定していたよりも強大で、我が国の前線は日に日に後方へと押し込まれていった。そうした中で、北の前線に私が指揮官として出陣することになった。

——それは、一年前のこと。

『フランツェスカ。現在の我が国の戦況はお前も知っておろう？』

『……はい、お父様。聞き及んでおります』

『北の前線、あの地を突破されてしまえばシュヴァルツヴァルトの軍勢はこの王都まで我が物顔で進軍してくるだろう。それだけは絶対に阻止せねばならん』

『はっ』

『……そして王たる者は民を導いてやらねばならぬ。フランツェスカ、お前も来成年人すれば王太女となる。よって北方前線の指揮をお前に全て任せる』

『は……？ 任せるって……』

『女王になるならば覚悟を見せろ。モルゲンロートの未来のために。そして国民のために……北に行ってこい、フランツェスカ！』

そうしてお父様は、戦鬪が激化<sup>げきか</sup>していた北の最前線へと成人前の私を送り込んだのだ。……今にして思えば。

この出陣命令は、王位継承者である私を戦争で死なせるための口実だとわかる。

現にレナードは、「また君に会えるなんて、思っ<sup>て</sup>てい<sup>な</sup>かつ<sup>た</sup>」と言っていた。私の出陣を見送ってくれた彼は、それが今生の別れになると知っていたに違いない。

それにお父様は、私に『生きて帰ってこい』とは、一言も言わなかったのだから――

「――フランツェスカ、アリーシアに謝れ」

「は？ 私が謝る？ アリーシアに……？ それは今流行りの冗談かなにか……」

もしやとは思うけれど……それ、本気で言っている？

不可解な過去の記憶を思い返していた私は、レナードの唐突な言葉に思わず王族らしからぬ言葉を返してしまった。

「アリーシアは身体が辛いのに無理をして、君に会うためにここまでやってきてくれたのだぞ？ それなのに……感謝をすることで、彼女を貶める<sup>おとし</sup>ようなことを言うなんて……！ 君はそれでも姉なのか!?」

「……なにを言い出すのかと思えば実にくだらしない。私はアリーシアに会いにこいだなんて頼んだ

覚えはありませんが？ 勝手にこの子がここにやってきただけでしょ」

残念ながらレナードは本気だったようだ。

こんなことになるならば、いつそのこと『会いに来ないで』とでも、アリーシアに頼んでおけばよかったのかもしれない。そうすればこんな不愉快な気分には、ならず済んだ。

もっと早く気が付いていればそうしたのに、実に残念である。もし次があるなら『迷惑ですの由来訪はお控えください』と、手紙にでも書いて送ることにしよう。

「なっ……!?! フランツェスカ！ その酷い言い草はなんだ！ アリーシアは君のことを心配して会いに……!」

「……とても言いにくいんだけど。アリーシアが住まう宮からここまででは、のんびり歩いても五分ほどの距離なのよ？ もしや、レナードはご存じなかった……?」

感謝するほどの距離ではないと思うのは私だけだろうか。

それに『アリーシアは身体が辛いのに無理して私に会いに来た』とレナードは言うけれど。

つい今しがた、元氣そうに声を張り上げていたように見えた。あれは幻だろうか。

「レナード様……!! 私は大丈夫ですわ、だからフランツェスカお姉様をあまり責めないであげてくださいませ」

「アリーシア、君は本当に優しい子だな……」

「そんな、私なんて……。それにフランツェスカお姉様も今は気が立っておられるだけですわ、落ち着かれたら……きつとレナード様の苦しいお気持ちも、わかっただけですわ、落

「アリーシア……!」

花が綻ぶような甘い笑顔を浮かべて、にっこりと可愛らしく微笑むアリーシア。

そんなアリーシアに、レナードは見惚れるように頬を赤く染めた。

ある意味、私はアリーシアのことがすごいと思う。

腹黒という言葉では到底言い表せない、それはもはや芸術の域。

それに引き換えレナード。貴方の頭の中はお花畑かなにか……だろうか？ この男のことを信頼していた自分が心底恥ずかしい。それと同時にこの国の先行きが心配になった。

「……酷い三文芝居ね。あとはお二人でお好きにどうぞ？ 私は疲れたので先に部屋に帰らせてもらいますわ」

……なんか、うん。はい。もう、どうでもよくなってきた。

さっきまでの激しい怒りが、呆れに変わる。

だから私は再びぐるりと方向を転換して、歩き出した。

「フランツエスカ、待て……!」

それでもまだレナードが私を呼び止めようとするとするけれど、もう私には話すことがない。

……それに。これ以上話したところで、なんの意味もない。だって来週には迎えがやってきて、

私は敵国だったシュヴァルツヴァルトに嫁いでいくのだから。

「——姫様!」

「ヘルマ……ただいまっ!」

一年ぶりに、宮に戻ってきた私を温かく出迎えてくれたのは。

今は亡きお母様と共に、クーゲル帝国からこのモルゲンロートにやってきた侍女のヘルマだった。

ヘルマはお母様が亡くなった後もずっと私のそばにいてくれた、まるで家族のような存在。

そしてこの王宮で唯一、私が気を許せる特別な人。

「姫様、シュヴァルツヴァルトに嫁がれるというのは本当でございますか……?」

「……ごめん。『立派な女王になる』って、お母様とヘルマに約束したのに」

あらためて言葉にすると胸が酷く痛んだ。

私はお母様と最後に交わした大事な約束を、守ることができない。

……帝国出身のお母様はよく言っていた。

『血筋だけの無能に王の資格はない』『王になる者は誰よりも強くあらねばならない』と。

だから私はその教えに従って、幼い頃から武を学んだ。

お母様の護衛を務めていた第三騎士団の騎士達に混じり、剣を振って馬に乗った。姫らしくないと貴族達に眉をひそめられ、帝国の教えは捨てろとお父様に言われても、止めることはなかった。

私自身、血筋だけを理由に王になるべきではないと思っていたから。

実際、北の地で軍を率いることができたのもこの経験が大きい。

私には特別な才能があったわけじゃない。

夜ごとお母様の膝の上で読んでもらった兵法書。あれは私にとっては絵本代わりだったが、戦場

に立った時。敵の動きや風の流れが、一本の線となって繋がっていった。

お母様には感謝してもしきれない。あの教えがなければ私は今、ここにいないのだから。だからこそ、お母様に誓った女王としてこの国を治めるといふ約束を守れないことが悔しくて仕方ない。

「そんな約束よりも！ 姫様はご自分の心配をなさってくださいませ！ これではまるで……人質、ではないですかっ……」

——人質。

ヘルマの言葉にはととした。敵国に嫁ぐということ、その本当の意味に今さらながら気づく。

しかし、その価値が、今の私にあるのだろうか。

「ヘルマ……私なら大丈夫だよ、だから心配しないで？」

「どこが大丈夫なのですか!? 戦地からやっと戻ってこられたと思っただけですぐに興入れなんて！ それにそのお身体とお顔はなんですか、全身傷だらけではないですか!? お美しいお顔が、なんとお勞しゅう……！」

「ああ、これ？ こんなのはただのかすり傷、ほっといたらそのうち治る……」

この程度の傷や凍傷は北の地ではよくあることで、気にするほどではない。

唾でもちよいとつけておけば、この程度の傷はそのうち治ると戦場で学んだ。

「……な、に、が『ただのかすり傷』ですか！ 姫様はこれからシュヴァルツヴァルトの王太子妃になられるお方なのですよ!? そんな傷だらけで、どうやってドレスをお召しになるおつもりです

か！」

「ドレス……？ あ、忘れ……」

すっかり忘れていた。ドレスなんて一年以上着ていなかったし、元より訓練用の軽装の方が着心地がよくて好きだった。なにより、自分がシュヴァルツヴァルトの王太子妃になると言われても実感が湧かないし、その姿を想像することすらできない。

「わ、忘れていらしたのですか!？」

私がそう言うと、ヘルマは深いため息をついて、頭痛でも堪えるように眉間に皺を寄せた。それに肩までがっくりと落としてしまっている。

「お化粧で隠せばなんとか……なるよね？」

多少厚化粧にはなるだろうが、傷が癒えるまでの間だけだし……まあどうにかなる。

……というか、ならないと困る。

「姫様……シュヴァルツヴァルトのフリード王太子は、北の前線では敵将を務めていらした方だったとお伺いしておりますが……それは事実ですか？」

「残念ながら、事実だね」

「ならば……姫様が北の前線にいらしたことは、口にされない方がよろしいかと存じます」

「ん……そう、だね。私も隠した方がいいと思う」

興入れしてくる王女が、まさか自分の首を虎視眈眈と狙っていた敵将だったなんて。シュヴァルツヴァルトの王太子も、わざわざそんな事実は知りたくもないだろう。

……それに。戦時中とはいえ、私はシュヴァルトの兵を殺してしまっている。それはどんな理由があったとしても消えることはない罪で、私自身が背負わなければいけないものだ。だけでもしそれを王太子が知ったら、敵将だった私に嫌悪感を抱くのは間違いないだろう。王太子妃としてどのような扱いを受けるかはわからないが、それがバレた際にどうなるかは想像に難くない。最悪の場合……外交問題にまでなりかねない。

隠すことは卑怯なかもしれない。

けれど私はその事実を隠し通さなければいけない、もう戦争なんて絶対に嫌だから。

お父様もそれをわかっているはずなのに、どうして嫁入りする王女を私に決めたのか。さっぱりわからない。

「……姫様、あまり時間がありません。とりあえず湯浴みをいたしましょう。そして湯浴みが終わりましたら御髪を整えて……」

「え、休む時間は？ 疲れたから、のんびりゴロゴロしたい……」

「そんな時間は一切ございません！ 来週にはシュヴァルトから迎えがやって参ります。それまでにその傷だらけの顔と身体をどうにか見られるようにしなくてはならないのですよ!」

「え、見られないほど酷い!? これで謁見の間に行つたのに……」

「なつ!? もしやそんな格好で……? 皆の前に……お顔をお出しになられたと……?」

「いや、そんな格好つて……王都に入る前の街で宿屋に寄つて水浴びはしたよ？ 服も一応全部着替えたし……?」

「水浴び……? 姫様が?」

私のその一言に、ヘルマのこめかみがぴくりと動いた。そして私の頬の傷にそっと触れた手はずかに震え、なにか言葉を飲み込むように唇が引き結ばれる。

「うん、だから泥汚れは落ちて……」

……ふつふつと。まるで静かに煮えたぎる鍋のように、隠しきれない怒気がヘルマからじわじわと滲み出ているような気がする。

「そう、ですか。とりあえず姫様、どうぞこちらへ……傷の手当ても必要ですの」

「え？ あ、うん……」

ヘルマがなにをそんなに怒っているのかよくわからないけれど、その怒りは私に向けられたものではなさそうなので。触らぬ神に祟りなしということで、放っておくこととした。

◇

——翌日、穏やかな屋下がりのこと。

シュヴァルトからの迎えが予定よりも早く到着したと、伝令の騎士によって報告がなされた。その報告によれば彼らがモルゲンロート王宮へ到着したのは私が帰還したその翌朝のことで、今は王宮の貴賓室でお待ちいただいているという。

予定よりもずいぶん早いシュヴァルト使節団の到着は、モルゲンロート王宮をざわつ

かせた。改めて私の輿入れについて、両国で検討がなされ。結果として、私のシュヴァルツヴァルトへの輿入れが大幅に繰り上げられることになったらしい。

ただでさえ準備期間が足りないというのに、シュヴァルツヴァルトからの迎えが予定より早くやってきたせいで私は、さらに時間的な猶予を失う羽目になってしまったのである。

『相手の都合を少しは考えろ』

そう心の中で憤るけれど、それを表に出すことはできない。

シュヴァルツヴァルトの王太子妃となる以上、これからはあちらの考えに従わねばならず、これまでのように生きることは決して許されない。

その事実を、この一件で改めて思い知らされてしまった。

重苦しい溜息を吐きながら、私は鏡の前でヘルマに今夜の支度を任せた。

私はこの後、シュヴァルツヴァルトの使節団に歓迎の挨拶をしなければいけない。

正直なところ時間がかかり惜しいのだが、こればかりは仕方がない。

シュヴァルツヴァルトは少しでも気を抜けば足をすくわれかねない厄介な相手であり、気を引き締めてかかる必要があるのだから。お父様達だけに任せるなんてものほかである。

「ねえ、ヘルマ。シュヴァルツヴァルトから迎えが来るのって……来週の予定じゃなかった？」

「私もそう聞き及んでおりますが……」

「……せっかちな男は女に嫌われるって、知らないのかな？」

「ふふ、そうでございますね。あ……姫様、動かないでください、紅がずれてしまいます」

「……それはそうとして、ヘルマ？ 鏡の中に物語に登場しそうな『悪女』が映っているような気がするのだけれど……気のせいかな？」

鏡に映る自分の変わり果てた姿に、思わず非難の声が出た。

「姫様、これでもかなり抑えてもらったほうなのでございますよ」

「抑えた……？ 嘘、これが!？」

驚いて、つい聞き返してしまう。

今のこの姿を例えて言うのならば、国費を無駄にする傲慢王女……だろうか？

装飾過多な真紅のドレスは煌びやかという評価を通り越して普通に趣味が悪く、鏡越しに見ているだけで目が痛くなるし、寶石の付けすぎで普通に重い。これが控えてもらった結果というのなら、元々の案だったらいっただんなドレスに仕上がっていたのだろうか。

それに顔の傷を隠すために何度も塗り重ねられた白粉は仮面のように厚くなっていて、元の顔がわからない。

なによりも、私の赤い髪が真紅のドレスと合わさり、悪女の中の悪女となってしまっていた。

「はい。本当はこのドレス、更に豪華絢爛な金のドレスになる予定だったのです……」

「金……？ もしかして金箔でもドレスに貼り付けるつもり……だったとか？」

王女という立場上、これまで色々なドレスを身に付けてきたが……金のドレスなんて見たことも聞いたこともない。

「姫様、まさにその通りでございます。ですが私が『これ以上は重くて姫様が歩けません』と申

し上げましたところ、やつと変更を許されまして……このドレスに落ち着いた次第でございます」  
自然と溜め息がもれた。

そして、このドレスを仕立てるよう指示したであろう人物の顔がすぐに頭に浮かんできた。  
その人物とは、そう……側妃カトリーナ。

彼女は親切にみせかけて、ことあるごとに私を陥れようと画策してきたから。

「考案したのはたぶん、カトリーナ様だよね？ 大方、国費を無駄にする傲慢な王女としてシュヴァルツヴァルトに送り出そうっていう魂胆……かな」

「姫様……」

申し訳なさそうに視線を落としたヘルマの反応を見る限り、私の予想は当たっていたらしく。

もう一度鏡越しに自分の姿を見れば。どこからどう見ても悪女にしか見えないその姿が滑稽で、私の口からは乾いた笑いが勝手にこぼれていた。

——謁見の間。

使節団を護衛するシュヴァルツヴァルトの騎士達は、一糸乱れぬ動きで入場してきた。

圧巻の隊列に、謁見の間に集まったモルゲンロートの貴族達も思わず息を呑み、見惚れたような視線を向ける。

我が国ではシュヴァルツヴァルトを、野蛮で血なまぐさい軍事国家だと語る者が多い。

けれどその噂とは裏腹に、実際の彼らは、国への忠誠と規律を重んじる騎士達だと、戦場で相対

した私は知っている。

……ただ。北の砦から帰ってきたばかりの私にとつて、その光景は戦場の冷たい記憶を思い起こさせただけで、見惚れる理由にはならなかった。

そしてシュヴァルツヴァルトの騎士達の中心には、驚くべき人物がいたのである。

その人物とは、これから私が政略結婚により嫁ぐ相手。

シュヴァルツヴァルト王国の王太子、フリード・ルートヴィヒ・シュヴァルツヴァルト。

けれどなぜ……彼がこの場に？

和平へ向けた交渉が行われ停戦が成立したとはいえ、つい先日まで我がモルゲンロートとシュヴァルツヴァルトは敵国同士だったはず。それなのにシュヴァルツヴァルトの王太子が、こうもあつさりど敵国の王宮に足を踏み入れるなど……いったい、なにを考えているのだろうか。

黒檀のような黒髪に薄氷を思わせる冷たい青の瞳、そしてシュヴァルツヴァルトの漆黒の軍服。北の地でたった一度だけ、この男の姿を見ることがある。

あの日は猛吹雪が吹きつけていて、その顔立ちまではしっかりと認識できなかった。

でも確かに覚えている、吹雪に舞う黒髪を——

「——モルゲンロート王国第一王女、フランツェスカ・モルゲンロート様でございます！」

私の存在を知らしめるように、侍従の声が謁見の間に高らかに響く。

その声に促されるように私は、シュヴァルツヴァルトの王太子の前にゆっくりと歩を進めた。

「ようこそ、我がモルゲンロートへ。私はフランツェスカ・モルゲンロート。嫁入りに際し遠路は

るぼるの出迎え、感謝いたしますわ」

……シュヴァルツヴァルトの王太子と、目が合った。

——その瞬間。

私の姿をシュヴァルツヴァルトの王太子は怪訝そうに眺め——蔑むように、鼻で笑う。けれどすぐに、その表情は王太子らしい社交的な笑みに塗り替えられた。

「私はフリード・ルートヴィヒ・シュヴァルツヴァルト、美しい花嫁を迎えに参上いたしました。噂に違わず薔薇のように艶やかな方だ」

「まあ……王太子殿下は口がお上手でいらっしやるのね？」

よくもまあ、そんな歯の浮くような台詞が平気で吐けるものである。

そんな噂、私は今まで一度も耳にしたことがない。

王太子の見え透いた嘘に、心の中で舌打ちした。……それに。そう思っていないどころか、悪感情の滲む怪訝な顔をしていたくせに……なんて白々しいのだろう。

「王太子殿下はやめてくれ、これから私達は夫婦となる身。できれば名前で呼んでほしいし、私にもぜひ貴女を名前で呼ばせてほしい」

「……ではフリード、これからよろしくお願いしますね？ 私のことも気軽にフランツェスカ……と、呼んでくださいませ？」

「つ……ええ、こちらこそ」

まさか敬称まで省かれるとは思っていなかったのだろう。

王太子——フリードは一瞬驚いたように目を見開いた。そして後方で待機する使節団の騎士達がわずかに身を強張らせたのが、視界の隅に映った。

やはりシュヴァルツヴァルトは——この男は信用ならない。

甘い言葉は上辺だけで、その裏でなにを考えているのかわかったものではない。なにがあっても絶対に気を許しては駄目、自分のことは自分で守らなければ。

「……フリード殿、フランツェスカ。つつがなく対面を果たせたようだなによりだ。この後二人で茶でも飲んで、親交を深めるがよい」

玉座から響いたお父様の声に私は視線を向ける。

見上げれば玉座に座るお父様と、その隣には優雅に微笑む側妃カトリーナがいた。

——そして。

甘い微笑みを浮かべ、こちらに向かって駆け寄ってくるアリーシアの姿が目に入った。

「フランツェスカお姉様！」

「……アリーシア、どうしたの？ 公式の場合、大声で騒いではいけないわ」

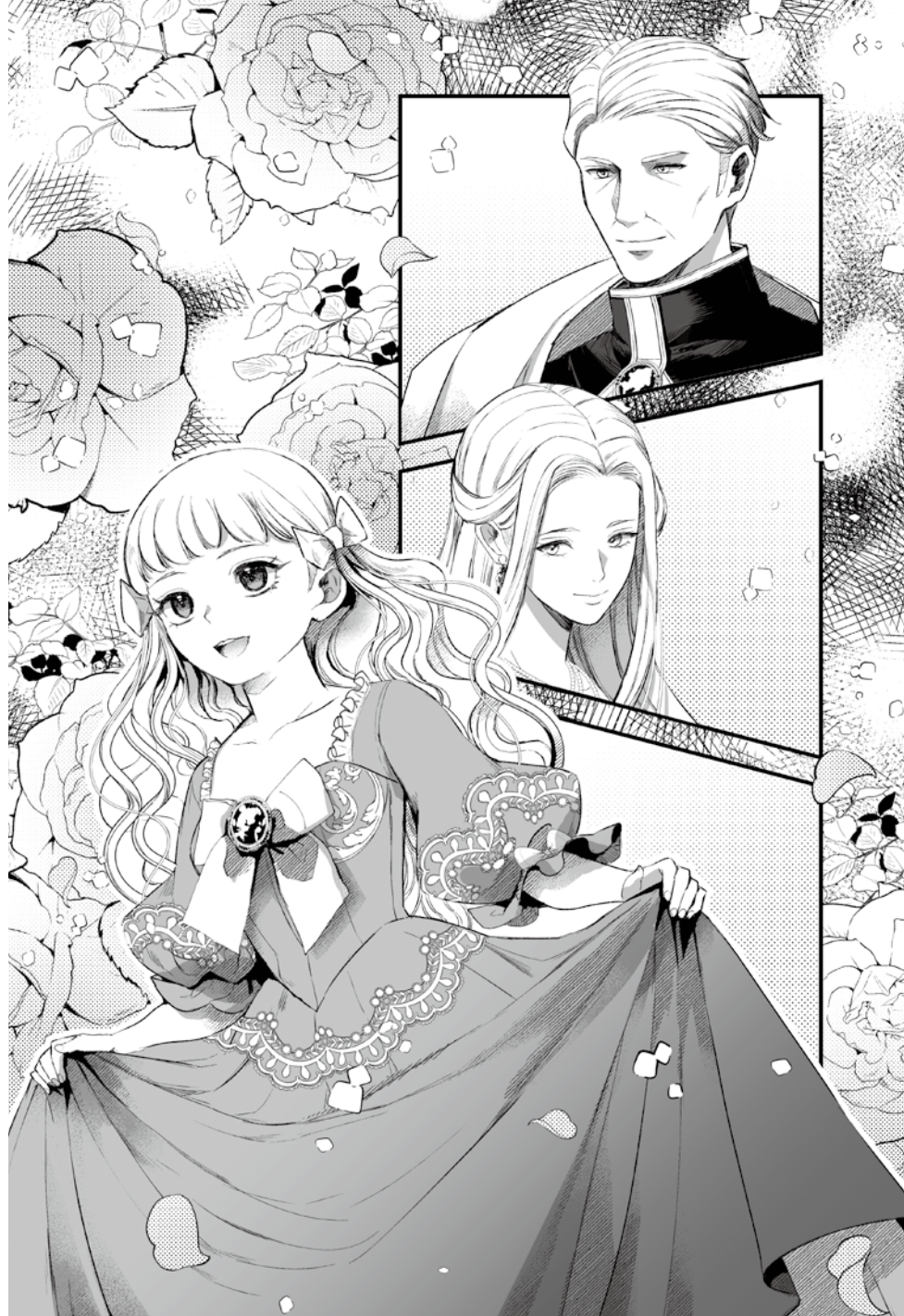
「ごめんなさい、フランツェスカお姉様。だけど私も、王太子殿下にご挨拶がしたかったの！」

「挨拶……？」

私の問いかけにアリーシアは無邪気な笑顔を浮かべて、なにも知らない無垢な妹を演じる。

「フリード王太子殿下！ 私は第二王女のアリーシア・モルゲンロートと申します。私のこともア

リーシアと、名前で呼んでくださいいね？」



アリーシアはそう言って緩やかに波打つ金髪をふわりと揺らし、桃色の可憐なドレスでカーテシーをしてみせた。その愛らしい姿はまるで地上に舞い降りた天使のようで、周囲の貴族達からは感嘆の声が漏れ聞こえる。

……やられた。

私に用意されたこの真っ赤なドレスはこの状況を作るために用意された、布石<sup>ふせき</sup>。

『妹の方が良かった』と、フリードに思わせるための。

「……ええ、もうお会いすることはないでしょうが、よろしくお願ひします。第二王女」

「えっ……？」

フリードの冷やかな一言にその場の空気が一変する。

そう返されるとは、思っていなかったであろう。アリーシアの笑顔が、石造のように固まった。

……そして。私もまた、フリードの態度に、驚きと戸惑いを覚えずにはいられなかった。

◇

「——では、失礼いたします」

紅茶と焼き菓子が載った銀のトレイをテーブルに置いた侍女達は恭しく礼を執った後、部屋から退出していく。

その姿を最後まで見送れば、気の進まないお茶会の始まりである。

「……改めまして、遠路はるばるモルゲンロートまでおいでくださり誠にありがとうございます。まさかシュヴァルツヴァルトの王子殿下自ら、お迎えに来てくださるなんて夢にも思わず、この上ない光栄に存じます」

「夫となる者として、妻を迎えに来るのは当たり前のことです。どうかお気遣いなく」

穏やかな笑みを浮かべて話すフリードは、謁見の間でアリーシアに対して冷徹な対応を行った人物と同じとは、到底思えないほど完璧に偽りの仮面を被つていて。

もはや別人だと言われたほうが納得できる。

「ご配慮、痛み入りますわ。王子殿下」

だからあえて名前では呼ばずに、敬称で呼んでみることにした。

その仮面を僅かにでも剥ぎ取つてやりたくて。

「フ란ツェスカ、敬称が戻ってしまっていますよ？ 貴女には名前で呼ぶようにとお願ひしたはずですが……」

「公私混同はしないほうがよろしいのかと思ひまして。……私の考え違いでございましたか？」

「……どうしてそう、思われたのですか？」

僅かにだが、フリードの顔色が変わった。

名前で呼び合おうという提案はやはり彼の本心ではなかったらしい。

「察しただけですわ、これはいわば女の勘というやつですわよ？」

「ふむ……？ 貴女は意外と頭がいいのですね……対応を少し考え直す必要があります」

「それは褒め言葉として受け取つておいたほうがよろしいのかしら？ それとも……」

「ああ、気を悪くしたのなら謝ります。すいません。私は貴女のことを少々侮つていたようです。

ですが、これはこれで面倒がなくていいのかもしれないね」

「面倒、ですか」

侮られたのはこのドレスと化粧のせいなのか、それとも私が人質に選ばれた王女だからだろうか。ただ、そのどちらかだとしても。……あまり気分のいいものではない。

「ええ、賢い貴女にならば本音を話しても問題なさそうだ。私は貴女を……愛するつもりがありません」

「それは……」

「ああ、ですが勘違いしないで下さい。愛するつもりはありませんが冷遇するつもりもありません。それに王太子妃として何不自由ない生活は保証しますし、公の場では夫としての務めを果たすつもりです。……ですが、愛を望まれても与えることはできません」

「公の場では、ですか」

「ええ、そして私が貴女に望むのは、公の場で良き妻として——和平の象徴として振舞っていたかくことのみ。あとは好きにしてください構いません。王太子妃としての立場上、外で子を作られたら困りますが、恋人を作ることは止めません。あとできれば私に干渉しないでいただけると助かります。私も貴女に干渉しませんので」

正直なところ。ついこの間まで敵国として戦争をしていた相手であるから。結婚をしたところで

最初から愛されるとは思っていなかったし、敵将だった彼を自分が愛せるとも思っていないから、面と向かって『恋人を作ってもいい』などと宣言されるとは流石に予想していなかったから、とても驚いた。……私も、なめられたものである。

「そうですか。ですがご安心ください、王太子殿下。私も貴方を愛するつもりはありませんので」「え……っ？ ……それは……」

私にそう返されるとは流石に予想していなかったらしく、フリードは言葉を詰まらせた。

この返しはなかなか効果的だったらしい。

「この結婚は両国の和平のために結ばれた、ただの契約です。愛を求められても困りますよね、それについて私も全く同じ意見です」

「そ、そうですか……」

ほんの一瞬、驚いたような表情を浮かべたフリード。

おそらくだけど、そう言っただけで冷たくすれば私が泣き縋ってくるでも考えていたのだろう。

アリーシアのように愛されて守られるのが当たり前のお姫様であれば、夫に愛されないというのは嘆き悲しむべき事柄なのかもしれない。それに『人質』として己の立場を理解できない者ならば、その言葉に怒りをあらわにするだろう。

だがこの程度のこと、女王になるべく帝王学を学んできた私が動揺するわけがない。

「ええ。王太子殿下も私と同じ考えでも助かりましたわ。和平のために手を取り合うことは厭いませんが、私も好きでもない殿方と……なんて、虫酸が走りますもの」

「っ……そういえば。一つ貴女にお伺いしたいことがあるのですが、その瞳の色は？ とても珍しい……美しい色合いですね」

そう言っただけで、フリードは私の瞳をじっと興味深そうに見つめてきた。

きつと話題でも変えたいのだろう。

これ以上いじめるのは無粋な気がするし、その話に乗ってあげることにした。

「……私の瞳の色は母譲りですわ。ご存知かもしれませんが、私の母はクーゲル帝国出身ですよ。こちらでは少しばかり珍しい色合いかもありません」

光の加減で赤や青に見えるこの紫の瞳、これは帝国の王族だけが持つ特別な色。

幼い頃、この瞳の色を鏡に映しては、亡くなったお母様のことを私は思い出していた。

「帝国の……それで……」

何気ない一言。

ただその声音には、どこか含みのある響きがあったのを私は聞き逃さなかった。

この紫の瞳になにか……あるのだろうか？

と、思ったが。フリードは私の母が帝国の皇女だと思い出しただけかもしれない。

愛するつもりがなくても結婚相手の事は一応調べるだろうし、敵将だと知ることは難しくても血縁関係は簡単に辿れる。ただ実際のところ、お母様やヘルマ以外の帝国出身の者と私は直接会ったことがないのだが、あえてそれを言う必要はないだろう。

そう考えて、私は微笑んだ。

フリードとの話を終えて、部屋に戻つてくると、ヘルマが私に告げた。

『姫様、どうか……どうか……落ち着いて聞いてくださいませ……』

『え、なに……どうかしたの、ヘルマ？』

『先ほど、国王陛下から私に命令が下りました』

『命令？ お父様からヘルマに……？ それはいったいどんな……』

『……姫様の輿入れに同行してシュヴァルトゥアルトに行くのではなく、クーゲル帝国に帰国せよとのことでございます』

そして私は今、目の前の父親を睨みつけている。

「ヘルマをシュヴァルトゥアルトに連れていけないって。お父様、それはどういうことですか!？」

「言った通りだ。ヘルマはお前の輿入れには連れていかせぬ。あの侍女は帝国の人間だ。お前が嫁に行ったあとにはあちらに帰す」

「帝国に帰すって……そんな！ 私はヘルマがいないと……」

「心配するな、フランツェスカ。代わりの侍女はこちらでちゃんと用意してある」

代わりがいればなんでもいいわけがない。しかも「心配するな」って。

いや……それ、心配しかないのだけど!?

「代わりの侍女なんて私は必要ありません！ だからヘルマをシュヴァルトゥアルトに連れていく許可をください。帝国に帰すだなんて……やめてください！ お願います、お父様……!」

「……フランツェスカ？ 話はこれで終わりだ、もう出て行きなさい」

「っ……お父様!」

「出ていけ、お前にはもう……用はない」

用はないって、なにそれ。私のこと、なんだと思っているのだろうか？

お父様にとって私は、読み終えた書類かなにかなのだろうか？

用済みになったら……捨ててしまえる存在なのか？

フリードとの対面を終えて疲れきっていたせいなのだろう、私は自分を抑えることができず衝動的に口を開いていた。

そして口から溢れるように零れだしたのは、心の奥深くにしまい込んでいた疑問。

「お父様……一つだけ、教えてください。私はどうしてお父様に……愛されないのですか……?」

「……お前は、産まれるべきではなかった」

ずっと、気づかないふりをしてきた。

どれだけ酷い仕打ちをされても、気にするほどのことでもないと言いきかせていた。

どんなに冷たくされても強がって、それはきつと私の努力が足りないのだと思い込んで必死に耐えてきた。

……なのに、その言葉がすべて壊した。

後継者として認められたい、娘として愛されたいと願ってきた、私の心を。

「私は、お父様にとつて……いらない存在だったのですね……？」

声が震える。溢れた涙が頬を伝って、床に落ちていく。

そんな私にお父様はなにも答えず、興味を失ったかのように背を向けた。

部屋を出ると、不思議と涙は止まった。

「戻らなきゃ……」

そして宮に戻ろうと角を曲がった、その瞬間。

ちょうど前から歩いてきたフリードに、ぼったりと鉢合わせた。

「フラン、ツェスカ……？」

「……っ、王太子殿下!？」

そして私の顔を見たフリードは、驚いたように青の瞳を見開く。

彼がこんなにわかりやすく感情を表に出したのは、この王宮に来てこれが初めてではないだろうか。泣き顔を見られたことは非常に不意だが、この男には女の涙に動揺する可愛らしいところがあるらしい。

「泣いて……？」

「……あら、王太子殿下！ このような場所でお会いするなんて奇遇ですね。夜のお散歩ですか？」

「え？ ……あ、いえ。私はモルゲンロート王に少しお話がありまして。それでこちらに」

「そう、ですか。あの人に……」

少し前の私だったなら、その話の内容がどんなものなのか気になったことだろう。

けど……もう、全部どうでもいい。

「フランツェスカ。貴女はどうして……」

「……王太子殿下。名残惜しい限りですが私は先に失礼いたします。明日の出立の準備がまだ……残っておりますので」

「そう、ですか。引き止めてしまい申し訳ありません」

「いえ……では、また明日」

「ええ、また明日お会いしましょう」

フリードはずっと何か言いたげに、私のことを見つめていた。

だけど私はそれに気づかないふりをした。

私を愛することはないと言った男にあって、慰められたくなんてなかったから。

「っ……ふざけんなよ、あのクソ親父っ！ 絶対に、許さない……!」

思わず口について出てしまった粗野な言葉に、自分でも驚いた。

大方、戦場での言葉遣いが染みついてしまったのだろう。

……でも、これがきつと私の本音。

「姫様！ フランツェスカ様……!」

後ろから私の名を呼ぶ声があった。

その声にハツとして、振り返れば。そこには氣遣わしげにこちらを見つめるヘルマの姿があった。「ヘルマ……ごめんさい。私が不甲斐ないばかりに……お父様の命令、覆せなくて……」

「なにをおっしゃいますか！ 姫様は大變ご立派に成長なさいました。貴女様はなににも悪うございませぬ……ですからそんなこと、おっしゃらないでください」

「ヘルマっ……」

慰めるように私の手を強く握ってくれた皺だらけの手は温かくて、泣きたくなるくらい優しくかった。

——ちようどその時。

来客を告げる、侍女の声が扉の向こうから聞こえてきた。こんな時間に誰だろうかと、侍女に問うと。北の前線で共に戦ってくれた、第三騎士団の団長バナード・ブラウンだった。

「突然お伺いして申し訳ありません。ですが王女殿下がシュヴァルトに輿入れされると聞き、いても立ってもいられず……」

「ありがたい、バナード。でも王女殿下呼びは少し寂しいわね？ 北の前線ではみんなも私のことを『姫様』って親しげに呼んでくれていたのに」

「っ……それは、えっ……とですぬ……」

ヘルマがいる手前、そう呼ぶことができなかったのであろうバナードは狼狽したように言い淀む。

「……姫様、あまり騎士団長様を虐めてはなりませんよ」

「ふふっ、バナードごめんさい。会いに来てくれたのが嬉しくて、つい調子に乗っちゃいま

した」

これ以上やるとヘルマに本気で叱られるのは経験上わかっているので、私はすぐに謝罪した。

ヘルマは優しいだけの甘い侍女ではない。

礼儀や礼節にはとても厳しくて、怒らせるとめっちゃくちゃ怖い。

「姫様は、どこにいらっしやってもお変わりなきようで、この老骨は安心いたしました」

「そう、ですか？ バナードは……少し老け込んだような気がするわね？ そろそろ引退したほうがよいのではありませんか？」

「姫様、年寄り扱いはやめてください。ワシはまだまだ現役！ 若いモンにはまだこの座は譲れませぬ！」

「自分で自分のことを老骨だなんていつもおっしゃるくせに……」

バナードはもう後継に後を託して、第一線を退いてもいい歳。

だから本当は今回の戦争にはいるはずのない人物だった……はずなのだけど。私が北の砦に到着すると、そこにはバナード率いる第三騎士団の姿があつて。どれ程、心強かつたことか。

剣を握り始めた幼い頃からバナードは、まるで師匠のように私を導いてくれた。

——朝の光が照らす騎士訓練場。第三騎士団の騎士達やバナードが見守る中で幼い私は木剣を小さな手で握り、必死に剣を振っていた。

「姫様！ 足をもっと、肩幅と同じくらい広げなさい。重心が後ろに逃げてしまっていますぞ」

「足ね、わかつた」

低く響いたバナードの声に、私の背筋は自然と伸びた。

私が剣を振るうと、バナードは一步前に出て軽くそれを受け止める。

「姫様、それだと防御が甘く非常に危険です。次は腰を少し落として、剣を振ってください。あと肩の力を抜きませんと肩を痛めてしまわれます」

「腰を落とす、こう？」

「ええ、そうです。流石は姫様ですな、呑み込みが早い」

「じゃあ、いくよ！」

私は額に汗を浮かべながらバナードに言われた通り何度も木剣を振るった。

幼いながらに次期女王として力を持たねばならないことを知っていたから。

「悪くないですが。まだまだでございますな」

「えー！ バナード、もう一回！」

「ええ。姫様の望みならばこの老骨、いくらでもお相手いたしましょう」

剣術の訓練は他の授業と違ってとても厳しくて辛かった。手に豆ができて痛いし、一日も休むことは許されない。だから何度も心が折れそうになったし、無理だと諦めようとした。

けれどバナードは訓練中、優しい言葉をかけて幼い私を気遣ってくれた。

それに第三騎士団の騎士達も挫けそうな私を励まして、うまくできなくても「よく頑張った」と褒めてくれた。

王位継承者ならできて当たり前、できなければ叱責される。それなのに彼らは努力を誉めてくれ

て、決してできない私を責めることはなかった。

だから私はバナードや騎士達に認められなくて剣術を諦めずに続けた。

そうやって私は、どんな状況でも生き残るための必要な知識と技術を学んでいたのだった。

そんな幼い頃を思い返ししながら、目の前にいるバナードを見つめる。今でもその実力は衰えていないが、目元の皺は月日の移ろいを感じさせた。

「それはそうとして……姫様。このまま黙って引き下がるつもりでは、ごさいませぬな？」

「……まさか。でも今はその時ではありません、ですから大人しく従うフリをして様子見……かしら？ あとできちんとやり返すわー！」

「ハハハハハ！ それでこそ我らモルゲンロートの『紅の悪夢』ですな！」

「……えっ？ 『紅の悪夢』って、それいったい……なんのこと？」

「シュヴァルツヴァルトが付けた姫様の異名ですよ、もしや……姫様はご存知なかった？」

「あ、ありません！ なんなの、その恥ずかしい異名は……！」

そんな恥ずかしい異名を付けられていたなんて、私はなにも知らない。

もしそれを知っていたらその酷い異名をつけたシュヴァルツヴァルトの方に、本当の悪夢を見せてあげたのに。……残念である。

というか、もっとマシな異名はなかったのだろうか？

悪夢ってなに、悪夢って。命名センスがあまりにもなさ過ぎる。

「姫様の燃えるような赤の御髪を見たシュヴァルツヴァルトの兵が付けた異名、と聞いており

## 立ち読みサンプルはここまで

ます」

「私の髪？」

「ええ。そのお姿はあちらからは認識できなかつたようですが、風に靡く姫様の御髪は砦の下からも見えたようで……」

砦の上からフリードの黒髪が見えたなら、あちらからも私の赤い髪が見えるのは当然のことです。

「少し……気を付けなければいけませんね。この国の貴族の中に赤い髪を持つ者は、私の他に何人かいるけれど……」

ただ、この国に赤い髪かつ長髪の者は私の他にいない。

長い髪は富の象徴、特権階級の者は男性でも髪を長く伸ばすことがある。逆に女性でも身分の低い者は短く切りそろえることがある。

もちろん、手入れが面倒だから貴族でも短くしている男性の方が多いけれど。

「そうでございますね、気を付けられるに越したことはありません。先日もお話したように、もし姫様が北の砦で指揮官をされていたことをシュヴァアルツヴァルトに知られてしまったら……」

ヘルマは言葉を濁す。

嫁いでくる敵国の王女が自国との戦争で陣頭指揮をしていた敵将だった、なんてことを知られれば。最悪の場合、せっかく結ばれた和平協定が、破綻する可能性が出てきてしまう。

この結婚については思うことが多々あるけれど、もう一度戦争なんてまっぴらごめんである。だからそれだけは絶対に阻止しなければ。どんな手を使つてでも——

◇

——翌朝。

モルゲンロート王宮、正門前。

ヘルマに手を引かれ王宮から出てくると。

そこには、私とシュヴァアルツヴァルトの王太子が乗る予定の六頭立ての豪華な馬車を先頭に、輿入れの品々を積んだ荷馬車や共に向かう侍女達が乗る馬車が既に並んで待っていた。

敵国だったシュヴァアルツヴァルト王国への輿入れ。今までその準備をしていますが、どこか現実味がなかった。……が、その光景を前にして。

やっと実感が湧いてきた、私はもうモルゲンロートの女王にはなれないのだと。

「フランツェスカ、お待ちしておりました」

「お待たせいたしました、フリード」

そんな私にゆっくりと歩み寄ってきたのは——

これから私が嫁ぐ、シュヴァアルツヴァルトの王太子……フリードだった。

「フランツェスカ。貴女のような美しい人を妻に迎えられることは、一人の男としてこの上ない喜びです」

フリードは周囲の目を意識してなのか、美しい姫君に忠誠を誓う物語の中の騎士のように、私の